

歴史資料でよむ久喜市ゆかりの人物ブックレット ②

静御前の伝承

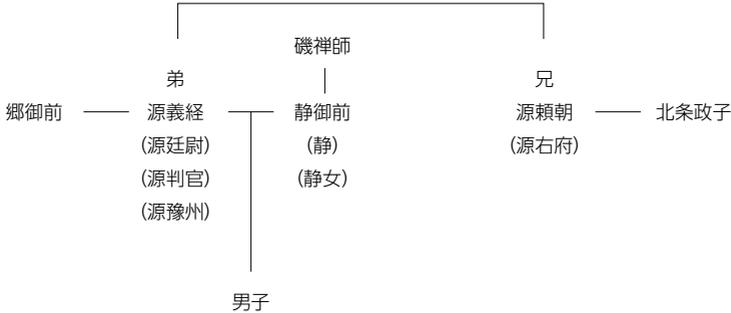
Shizuka Gozen

監修 筑波大学教授 白井哲哉
Shirai Tetsuya



久喜市教育委員会

静御前関係略系図



凡例

- 1 本書は、市ゆかりの人物に関する基本文献に相当する関係資料をまとめ、それらの関係資料を基礎にして、当該人物の叙述を試みたものです。
- 2 本書は、原則として三部構成になっています。
 - ① 当該人物の概要が理解できるように平易に叙述した専門家の寄稿文
 - ② 当該人物に関する関係資料を現代的な言葉で意識した現代語訳
 - ③ 当該人物に関する関係資料の本文（原漢文については訓読体で表記）
- 3 本書は、久喜市ゆかりの人物に関する一般的な読み物と、当該人物に関する基本文献に相当する関係資料を整理した資料集に相当するものです。
- 4 本書の刊行に当たり、次の方々にご協力をいただきました。ここに記してお礼申し上げます（敬称略）。

久喜市商工会、久喜市立郷土資料館、国立公文書館、国立国会図書館、
埼玉県立文書館、静御前遺跡保存会、武田庸二郎、村山吉廣
- 5 本書内では、「静御前」を「静女」と表記することがあります。読みは、和文では「しずか」と、漢文では「せいじょ」と読んでください。

表紙左

静女之墳〔「光了寺記念絵はがき」・個人蔵〕

この写真は、大正7年から昭和8年までの間に発行された『光了寺記念絵はがき』の中の一枚。

表紙右

静女之墳図〔「甲子夜話続編7」(平凡社・東洋文庫)266頁〕

この図には、「この碑は、御郡代中川飛驒守、御代官中村八大夫手附、宍戸三蔵に命じてこゝに建つと。」という文が添えられている。

❖ 目 次 ❖

1	寄稿「静御前の伝承」	1
	静御前はどんな人か	1
	歴史書や歴史文学に描かれた静御前	4
	久喜地域に伝わる静御前の伝承	7
	栗橋に伝わる静御前の墓	10
	中田に伝わる静御前の遺品	13
	再発見された静御前の伝承	15
	語り継がれる静御前の伝承	19
2	関係資料 解題	23
3	関係資料（現代語訳）	
	一 水野織部長福『結城使行 全』所収「江戸出発」抜粋	25
	二 松浦静山『甲子夜話』所収「卷之七十八 日光道之記」抜粋	25
	三 大田南畝『半日閑話』所収「卷四 静女の事」	27
	四 多紀元簡『日光駅程見聞雑記』所収「栗橋」「中田」抜粋	28
	五 光了寺「静女蛙蟆竜舞衣畧縁記」抜粋	29
	六 原念斎『許我志』所収「静女」抜粋	31
	七 佐藤一斎『日光山行記』所収「文政元年九月十三日条」抜粋	32
	八 光了寺廿一世釈西明「静女蛙蟆竜舞衣畧縁記」抜粋	33
	九 松浦静山『甲子夜話 続編』所収「卷之八十六 一 下総国光了寺 什物、静女白拍子舞衣之事并墳墓石碑之図 ○静之事〔寛政『日光 道之記』考〕注付」抜粋	37
	十 岡鹿門撰文「静女冢碑」	38
4	関係略年表	41
5	関係資料（本文）	
	写真（静女冢碑）	42
	一 水野織部長福『結城使行 全』所収「江戸出発」抜粋	43
	二 松浦静山『甲子夜話』所収「卷之七十八 日光道之記」抜粋	43
	三 大田南畝『半日閑話』所収「卷四 静女の事」	45
	四 多紀元簡『日光駅程見聞雑記』所収「栗橋」「中田」抜粋	46
	五 光了寺「静女蛙蟆竜舞衣畧縁記」抜粋	47
	六 原念斎『許我志』所収「静女」抜粋	49
	七 佐藤一斎『日光山行記』所収「文政元年九月十三日条」抜粋	50
	八 光了寺廿一世釈西明「静女蛙蟆竜舞衣畧縁記」抜粋	51
	九 松浦静山『甲子夜話 続編』所収「卷之八十六 一 下総国光了寺 什物、静女白拍子舞衣之事并墳墓石碑之図 ○静之事〔寛政『日光 道之記』考〕注付」抜粋	55
	十 岡鹿門撰文「静女冢碑」	56
6	主な参考文献	59

舞衣を着て舞う静御前

（『晚進魯（ばんしんろ）筆 閑窓瑣談 卷之一』・国立公文書館蔵）

「第二 安宅の閑并ニ静女の古跡」の中の挿絵。この絵には、「日光道中中田驛なる岩松山光龍寺の什物静女ケ舞衣の形を其儘にうつせしなり」という文が添えられている。



静御前はどんな人か

みなさんは静御前という人を御存知ですか。

静御前を知らなくても、源義経はみんな知っているでしょう。

源義経は平安時代の終わり頃を生きた人物で、鎌倉幕府を開いた源頼朝の弟にあたります。幼い頃は牛若丸と呼ばれ、京都五条

の橋の上で武蔵坊弁慶を負かして家来に従えたと伝えます。源氏

と平家の合戦で、義経は頼朝の命により平家追討の総大将となり

ました。そして一ノ谷（兵庫県神戸市）や屋島（香川県高松市）

などで戦功を挙げ、文治元年（一一八五）三月に壇ノ浦（山口県

下関市）で平家一門を滅亡させて京都に凱旋しました。

しかしその後は頼朝に疎まれ、妻子や弁慶などの家来と東北へ

逃げました。陸奥国平泉（岩手県平泉町）の奥州藤原氏の元へ身

を寄せましたが、文治五年（一一八九）閏四月にその藤原氏の軍

勢に襲撃され妻子と自害しました。義経と運命を共にした正妻の



源頼朝の前で舞う静御前（『義経記 巻第六』・国立公文書館蔵）

梶原正昭氏の新編日本古典文学全集62『義経記(ぎけいき)』（小学館）には、この挿絵に、「頼朝の面前で舞わせられる計略にはまったことをさとった静は、女の意地とばかりに、夫義経を慕う歌を唱い、頼朝を激怒させる」という説明を付している。

郷御前は、武蔵国河越庄（埼玉県川越市）の領主だった河越氏の一族です。

静御前は、京都にいた頃の義経が最も愛した白拍子で、義経への想いを貫き通した女性として広く知られています。

白拍子とは、白い水干（男性の服装）と烏帽子（男性の袋状の帽子）を身につけて神仏に舞を奉納する女性の芸能者です。また武士たちの酒宴に招かれて酌をすることもありました。白拍子の創始者である磯禪師は、静御前の母でもあります。

静御前が歴史上に登場するのは文治元年（一一八五）です。十一月に京都を脱出した直後の義経は静女を連れていましたが、吉野山（奈良県吉野町）で静女と別れました。静女は直ちに捕らえられ、鎌倉へ送致されて翌文治二年（一一八六）三月に幕府から義経の行方を尋問されます。しかし静女は答えません。

一方、白拍子としての静女の名声を知る頼朝と妻の北条政子は、静女に鶴岡八幡宮で舞を奉納するよう命じます。固辞し続けた静



キャラクターとして描かれた 静御前と源義経

(久喜市商工会提供)

久喜市商工会が、平成27年に設置した顔出し看板。

女ですが、ついに同年四月に舞いました。ここで静女が「吉野山よしのやまの白雪踏み分けてしらゆきふ 入りにし人の跡ぞ恋しきあひと」「しずやしずしずのおだまき繰り返しく 昔を今になすよしもがなむかし いま」と義経を慕う和歌を歌ったこと、激怒した頼朝を政子がいさめたことは、日本歴史上の名場面として語り継がれています。

実はこの時、静女の身には義経の子が宿っていて、七月に男子を出産しました。しかし女子なら命を助ける、男子なら殺すと幕府は決めていたので、泣き叫ぶ静女から子を取り上げました。その後の静女は母の磯禪師と一緒に九月に京都へ返されました。静女の生没年はわかっていません。

静御前を「知らない」という若い人でも、マンガ『ドラえもん』に登場する「しずかちゃん」は知っていますね。実は、彼女の本名は「源静香みなもとしずか」。「しずかちゃん」とは静御前にあやかったキャラクターだったのです。

『吾妻鏡 六』

（国立公文書館蔵）
文治2年4月8日条。



歴史書や歴史文学に描かれた静御前

いま述べてきた静御前の生涯は、『吾妻鏡』と『平家物語』に見られる記述に基づいた話です。

『吾妻鏡』は鎌倉幕府の公式な歴史書で十三世紀末頃の編さんと考えられており、静女の話が豊富に見られます。その一つに酒宴における鎌倉武士との会話が 있습니다。酔った武士が静女に卑猥な発言をしたところ、静女は涙を流して「頼朝の弟である義経に愛された私と、貴方あなたのような一般の武士が対面するなど、本来はあり得ない」と言い放ったそうです。義経を慕うした気位きぐらひの高い静女の性格をうかがわせる場面です。

『平家物語』は平家一門の栄華と滅亡を綴った軍記物語で、本文中に多くの古文書こもんじよを収録することがあり、十三世紀前半頃の成立と考えられています。ここには頼朝から義経追討の命を受けた僧とさのぼうしゅうしゆの土佐坊昌俊としかわが、京都堀川の義経館を襲撃する話が見られます。

『平家物語 卷第十二』

(国立公文書館蔵)

「土佐房被斬」の一部。

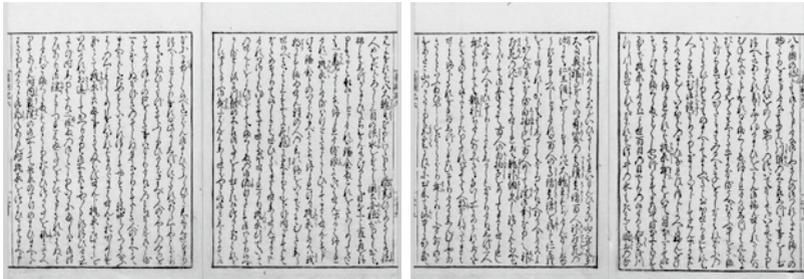


す。このとき静女は大通りに武者が大勢集まっていることに気づき、彼女の判断で目立たぬよう下女に外の様子を探らせませす。帰ってきた下女は昌俊の宿所で合戦の準備が整っていると報告しました。静女は鎧や具足を取って義経に投げるように着せかけ、合戦の準備を促したそうです。聡明で困難に立ち向かう芯の強い性格として静女が描かれています。

これに対し、十四世紀前半の成立とされる源義経の一代記を描いた軍記物語『義経記』では少し違う静女の様子を載せます。たとえば先に紹介した土佐坊昌俊による義経館襲撃の場面で、『平家物語』と同じく静女は下女を遣しますが、『義経記』で昌俊は下女を殺して義経の館に夜襲をかけます。敵勢の鬨の声に驚いて目が覚めた静女は傍らで寝ていた義経をゆり起こし、寝具の上から鎧や具足を投げかけて「敵が攻めてきました」と告げました。これに対し義経は「あわれな女の心はけしからん、昌俊が攻めてきたのだらう」と言ったと描かれます。ここでの静女は敵の襲撃

『義経記 卷第六』（国立公文書館蔵）

「静若宮八幡宮へ参詣の事」の一部。



に動揺する弱い性格として描かれています。

『義経記』によれば、京都に戻った静女はすっかり気落ちして出家し、翌年に二十歳で亡くなったとのこと。実際の静女の経歴を考えると、少し若過ぎるようにも思えますが・・・。

このように『吾妻鏡』『平家物語』と『義経記』で静女の様子が異なる背景には、時代ごとの女性観が変化したことが考えられます。

後の時代で描かれる静女のイメージは、『義経記』の影響を受けていることが多いようです。江戸時代の延享四年（一七四七）に初演された人形浄瑠璃・歌舞伎作品『義経千本桜』で、静女は京都を脱出する義経に自分もついて行きたいと言って聞かず、とうとう木に縛り付けられて置き去りにされます。

ところで『義経記』はもう一つ、静女の重要な登場場面を載せています。後白河法皇の時代、百年に一度といわれ賀茂川も干上がるほどの早魃が京都を襲いました。朝廷は比叡山延暦寺や奈良



内藤浩譽著『静御前の伝承と文芸』

（國學院大學大学院研究叢書 文学研究科13）

日本全国に残る静御前伝承を幅広く収集し、静御前伝承を類型的に整理するとともに、伝承地が水にまつわる内容や所在地という点で共通していることを指摘。

東大寺などから高僧を集め、平安京の大庭園であった神泉苑の池畔で雨乞い祈禱を行いました。また容姿端麗な白拍子一百人を集め、うち九十九人が雨乞い祈禱の舞を行いました。しかしどちらも雨は降りません。

ところが最後に静女が一人で舞うと、たちまち黒雲が湧いて稲妻が走り大雨が三日間降り続けました。法皇は静女の舞を「日本一」と賞したとのこと。この話は、後に静女のイメージを雨や水と結びつけかけになりました。

久喜地域に伝わる静御前の伝承

『吾妻鏡』や『義経記』では京都に帰ったとされる静御前ですが、実は日本各地に静女の伝承が数多く存在しています。

全国の静御前伝承を調査研究した内藤浩譽さんによれば、静御前の伝承は大きく三つに分類できるそうです。第一は、京都



光了寺（『光了寺記念絵はがき』・個人蔵）

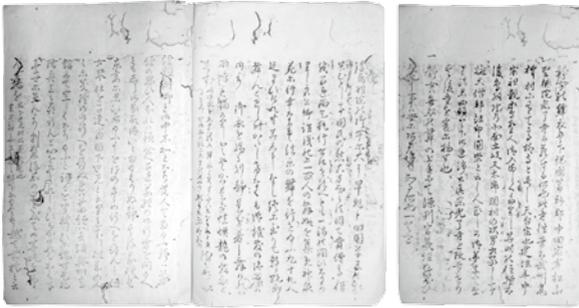
この写真は、大正7年から昭和8年までの間に発行された『光了寺記念絵はがき』の中の一枚。

へ戻った静女の余生を伝える【西日本型】です。静女の母である磯禪師の出身は大和国磯野（奈良県大和高田市）とも讃岐国小磯（香川県東かがわ市）とも言われ、それらの地を中心に伝承が残ります。

第二は、鎌倉を去った静女が京都に戻らずに義経の後を追った足跡を伝える【東日本型】です。鏡が池と亀井の水（栃木県宇都宮市）、美女池と静御前堂（福島県郡山市）、静御前の泉と墓（宮城県仙台市）、静御前の墓（新潟県長岡市）などがあります。

第三は、実は平泉で死なず北海道を目指した義経を追っていく静女の足跡を伝える【平泉以北型】です。鈴ヶ神社（岩手県宮古市）などがあります。

埼玉県久喜市から茨城県古河市にかけての地域（以下、久喜地域と呼びます）は、最も広く知られた【東日本型】の静女の伝承が伝わる地です。今では利根川で二つに分かれています。十七世紀始めに江戸幕府が河道改修を行う前は地続きの土地でした。



文政9年版
『静女蛙蟻竜舞衣略縁記』

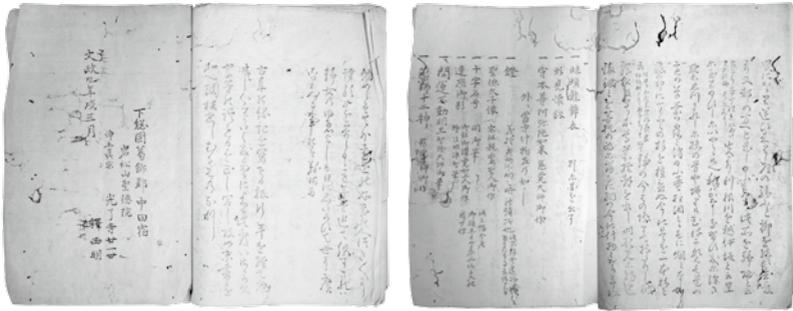
（『足立家文書』No825・埼玉県立文書館蔵）

光了寺の縁記ということで従来から知られているもの一つ。21世紀西明が、文政9年に改版した理由を末書きしている。

久喜地域の静御前伝承について、中田（古河市）の光了寺が文政九年（一八二六）に改版した『静女蛙蟻竜舞衣略縁記』で確認しましょう。

光了寺は、古利根川と渡良瀬川が交差する武蔵国高柳（久喜市）にあった天台宗の高柳寺に始まり、建保年間（一一一三～一一一九）に当時の住持が親鸞に帰依して浄土真宗光了寺に改めたと伝えます。その後、一説に寺は元栗橋（茨城県五霞町）へ移転し、さらに渡良瀬川に接する中田へ移り、先に述べた利根川の河道改修の際も境内が移動させられ、日光道中の宿場沿いの現在の地に落ち着きました。親鸞作と伝える木造聖徳太子立像（茨城県指定文化財）を蔵します。

さて鎌倉を去った静女は、義経の行方を捜すため琴柱という侍女を連れて東北へ向かいました。下総国下辺見（古河市）まで来たとき、静女は往来の人から義経が平泉で亡くなったと聞ききました。悲嘆にくれた静女は悩んだ末、出家して義経の菩提を弔う



ことを決意して橋を渡り前林（古河市）に向かいました。この橋は「思案橋」と呼ばれます。前林に着いた静女は、道筋の印にするため傍らの柳の枝を結んで京都を目指しました。この地を「静帰」と呼びます。

そこから伊坂（久喜市）までたどり着いた静女ですが、この地で旅の疲れから息を引き取ってしまいます。侍女の琴柱は、一説に光了寺で静女を葬り、墓の印に一本の杉を植えました。遺品は光了寺に納められて現在に至ります。以上が光了寺に伝わる静女の伝承です。なお地元では、静女の命日は九月十五日と伝わります。

ほかにも江戸時代には近隣の日光道中沿いに柳の大木があった、それは静女が使った楊枝の柳だったとの伝承が確認されています。

栗橋に伝わる静御前の墓



画かれた大杉と一言宮

〔奥羽一覽道中膝栗毛第四編卷之上〕
・国立国会図書館蔵

幕末に画かれた伊坂の大杉と一言宮。実際を画いたものか、想像で画いたものかは不明。大正6年に藤沢衛彦(もりひこ)がまとめた伝説集には、「子供を背負った旅の女が「一言言いのこしたい」といったにもかかわらず人柱に立てられたので、そのことを可哀そうだとして祀るようになった」とある。

静御前の墓はジェイアール宇都宮線栗橋駅の近くにあり、江戸時代には伊坂村でした。

現在は玉垣たまがきで囲まれた中に「静女せいじよ之墳ふん」と刻まれた平成十三年（二〇〇一）の石碑が建っています。その左手前の覆屋おおいやには、後で述べる享和三年（一八〇三）に中川忠英なかがわただてるが建てた「静女之墳」碑が納められています。現在の石碑はこの碑のレプリカです。

しかし江戸時代後期の十九世紀前半には高さ約十五メートル・周囲約六メートルの杉の大木がそびえ、その下に一言神社いちもんじの祠ほらなどがありました。静女の墓の景観はこの約二百五十年間で大きく変わっているのです。

静女の墓について記した最も古い記録は、今のところ元禄十六年（一七〇三）の『結城使行ゆうきしきこう』です。静女は鎌倉を去った後にこの地で住み続け、静女の没後に墓の印として植えた杉の大木があり、この地名を「杉立（すだち）」と呼ぶ、という話を書いています。



静女之墳と板碑（『埼玉県名勝史蹟写真帖』
・久喜市立郷土資料館蔵）

この写真帖は昭和3年刊行。「静女之墳」の左右に板碑が配されているのは、『許我志』の記述を意識して、撮影のために並べたと考えられている。

現在は伝わらない、当時の久喜地域で語られていた静女の伝承である可能性があります。

次の記録は、それから百年ほど下った寛政十一年（一七九九）の『甲子夜話』です。ここで筆者の松浦静山は伝聞として、静女の墓に墓石はなく杉の太木のみがあると書いています。

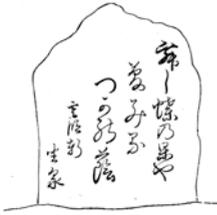
これが文化五年（一八〇八）の『許我志』によれば、杉の太木の下に正元元年（一二五九）銘の板碑が建っているとあります。板碑はその後行方不明になり、最近になって近隣の墓地から発見されました。『許我志』の記述以前に板碑がどこにあったかは不明です。

江戸幕府は文政六年（一八二三）に葛飾郡の地誌調査を行い、その成果を天保元年（一八三〇）の『新編武蔵国風土記稿』にまとめました。伊坂村の記述では静女の墓を紹介し、先に述べた「静女之墳」碑と杉の太木を描く図版が一緒に掲載されています。

坐泉の句碑図

〔甲子夜話続編7〕
（平凡社・東洋文庫）
267頁）

この図には、「この碑は、御能触頭山田嘉膳建つと。俗碑云に足らず。されども棄てるに忍びず。」という文が添えられている。



坐泉の句碑

〔光了寺記念絵はがき〕・個人蔵

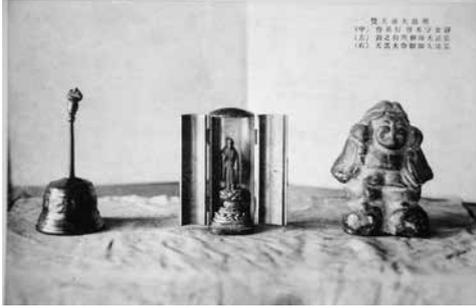
この写真は、大正7年から昭和8年までの間に発行された『光了寺記念絵はがき』の中の一枚。「舞蝶の果や夢みる つかの蔭」と刻まれている。



埼玉県庁は明治初期（一八七〇年代後半）に県内の地誌調査を行い、その成果を『武蔵国郡村誌』にまとめました。伊坂村の記述では弘化三年（一八四六）の利根川洪水の影響で杉の原木が枯死したこと、現在は円形の塚があること、その脇に享和三年（一八〇三）の「静女之墳」碑と、文化元年（一八〇四）の句碑が建っていることを書いています。句は地元出身の俳人である奈良坐泉の作です。

中田に伝わる静御前の遺品

文政元年（一八一八）の『日光山行記』で筆者の佐藤一斎は、光了寺がもと伊坂村にあったと述べています。ただ、光了寺は江戸時代に境内が移動したと伝わっているので、かつては私たちが想像するよりも静女の墓の近くに寺があっても不思議はありません。



静女の守り本尊

〔光了寺記念絵はがき・個人蔵〕

この写真は、大正7年から昭和8年までの間に発行された『光了寺記念絵はがき』の中の一枚。中央の仏像が、静御前の守り本尊と伝えられる阿弥陀如来像。光了寺の縁記には、慈覚大師・円仁の作とされている。両脇の品は、空海ゆかりの寺宝と伝えられているもの。

光了寺が伝える静女の遺品は次の三点です。

まず「静女蛙蟆竜舞衣」（古河市指定文化財「蛙蟆龍の御衣」）。

これは『義経記』に見える平安京神泉苑で静御前が雨乞い祈願の舞を行う際に後白河法皇（光了寺では後鳥羽上皇と伝わる。）から静女が拝領を受けたものとされ、静女はこの衣装を着て舞い大雨を降らせたと伝えます。上衣の遺品で下袴はありません。なぜこの衣装を「蛙蟆竜」＝「あまりよう」と呼ぶかわからないと、前出の縁記は言います。

次に義経が静女に与えたという形見の短刀。当時の柄や鞘はなしらさやく白鞘に納められています。そして静女の守り本尊と伝える伝じかくだいし慈覚大師作の阿弥陀如来像です。

このほか光了寺には静女の遺品と伝える直径約六センチメートルの小鏡が伝わります。これは、前出の縁記には記載されていません。さらに光了寺には、義経が平泉へ向かう際に寺へ預けたとされる鏡も伝わっています。



静女舞衣図

〔利根川図志 巻2〕
・国立公文書館蔵

様々な歴史資料から総合的に判断すると、上部左右に日月が、上部中央に北斗七星の一部が、その下に蓬莱山(ほうらいさん)が、蓬莱山の下に雨龍が、雨龍(あまりょう)の下側左右に鶴が、下部等に雲が、それぞれ配されていると考えることができる。



静女の舞衣

〔光了寺記念絵はがき〕
・個人蔵

この写真は、大正7年から昭和8年までの間に発行された『光了寺記念絵はがき』の中の一枚。

ところで、文政九年（一八二六）に改版された『静女蛙蟆竜舞衣略縁記』には、改版する理由が文章で追記されています。それによれば、「静女蛙蟆竜舞衣」は昔から光了寺に伝わっていたが、それを見たいと言う人は少なかった。平和の世になり「古物」を好む人が増え、「近頃」は街道を行き交う人々の誰彼となく見たいと言われることが増えた。しかし貧しい寺なので、収納箱などが古くなっても新調できなかった。最近「御寄附」を得たので今は誰に見せても恥ずかしくなくなった、とのことでした。

光了寺の門前には文化十二年（一八一五）の「祖師聖人並静女舊跡」の標柱が建っています。「祖師」とは親鸞のことです。もともと親鸞の由緒で信仰を集めた光了寺が、十九世紀前半には静女の由緒を持つ寺として有名になったことがわかります。

再発見された静御前の伝承



静女蛙蟆竜舞衣模様

（『弘賢随筆』・国立公文書館蔵）

前頁の図と鶴の描き方が微妙に異なっているが、雨龍についていえばこの写しのほうが実物に近い。文政9年改版の光了寺の縁記に「御衣の紋にあま龍の如き形有故にやあらんか」と追記されたように、当時の人々はすでにこの舞衣から蛙蟆龍=雨龍という認識ができなくなっていたようである。

久喜地域に伝わる静御前の伝承が十九世紀前半に有名になったきっかけ、それは江戸幕府による注目です。

静女の伝承に気づいた最初の幕府役人は、幕府の老中首座を勤めた松平定信の腹心の部下だった中川忠英と思われます。当時の中川は関東郡代という職にあり、関所の監視や河川の見分などを行いました。

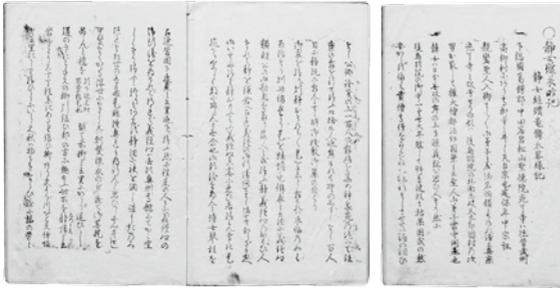
栗橋の関所番士を勤めた足立家に残る記録（埼玉県指定文化財）によれば、中川は寛政九年（一七九七）と寛政十一年（一七九九）に栗橋関所を訪れています。このどちらかで彼は静女の伝承を知り、おそらく光了寺や静女の墓を参拝し、江戸に帰って定信に報告したのではないかと思われます。同じ頃、先に紹介した松浦静山が静女の伝承を知ったことも関係が考えられます。当時の松浦静山は平戸藩主で定信とも交流がありました。

寛政十二年（一八〇〇）、定信は光了寺に「静女蛙蟆竜舞衣」の収納箱を寄附しました。寺では幕府の実力者からの贈り物にさ

旧版『静女蛙蟆竜舞衣略縁記』

（『視聴草』・国立公文書館蔵）

従来から知られている文政9年改版の縁記よりも古い縁記。松平定信から佐竹義和までの寄附の記録が追記される一方、石川忠房の寄附の記録はないので、文化5年以降の間もない時期に作成された可能性が高い。



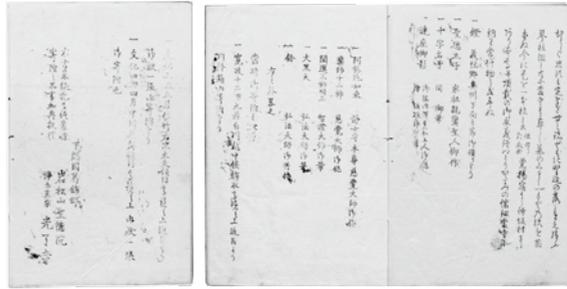
ぞ驚き喜んだことと想像されます。

享和三年（一八〇三）、中川は静女の墓に先に述べた「静女之墳」碑を建立しました。さらに文化四年（一八〇七）、中川は光了寺

へ「静女蛙蟆竜舞衣」の袱紗を寄附します。翌文化五年（一八〇八）には秋田藩主の佐竹義和も同じく「静女蛙蟆竜舞衣」の袱紗を寄附しました。

幕府の重要人物が光了寺に次々と寄附を行った情報が伝わり、幕府勘定所役人で文人の大田南畝や昌平坂学問所の塾長だった佐藤一斎をはじめ、江戸の知識人が次々に久喜地域を訪れ、静女の伝承を紹介しました。その後も、文政六年（一八二三）には勘定奉行の石川忠房が光了寺の縁記の原本を表装しました。

こうなると参詣者が急増したであろう光了寺は、「祖師聖人并静女旧跡」の標柱を建てた翌年の文化十三年（一八一六）に「静女舞衣懐旧古帳」を作りました。これは「静女蛙蟆竜舞衣」への感想の漢詩、和歌、俳諧などを書き綴る参詣者ノートの類です。



序文は江戸の国学者で歌人だった清水濱臣と小林良幹が書きま
した。

天保十二年（一八四一）、江戸で当代随一の作家だった為永春水
が随筆『閑窓瑣談』で静女の墓の伝承を取り上げました。そして
静女の話は誰でも知っているのに、その墓が江戸の近くにあるこ
とを誰も語らないのは残念だと訴えたのです。大きな反響があっ
たことでしょう。

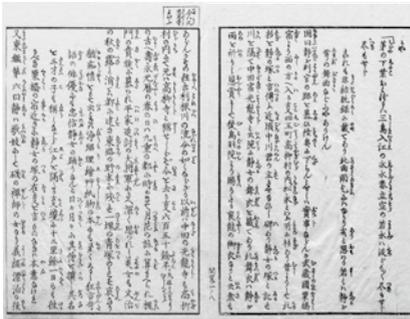
松平定信はじめ幕府の関係者は、なぜ久喜地域に残る静女の伝
承にこれほど注目したのでしょうか。それは当時の人々の間に広
まっていた義経北行伝説と関係があります。

源義経は平泉で死んでいない、実は奥州藤原氏の襲撃直前に北
方へ脱出し、津軽海峡を越えて蝦夷地（北海道）へ渡り、アイヌ
の人々のオキクルミ（神）となった。これが義経北行伝説の骨子
です。江戸幕府は蝦夷地の支配を強化する過程で自らこの話を広
めていきました。

『晚進魯筆 閑窓瑣談 卷之一』

(国立公文書館蔵)

「第二 安宅の関并ニ静女の古跡」の一部。



久喜地域に伝わる静女の伝承が注目された当時、幕府はロシアの進出に対応する蝦夷地政策の見直しを検討していました。その中心が松平定信です。中川は文化四年（一八〇七）に起きたロシアの択捉島襲撃に対処するため蝦夷地へ向かっています。佐竹はそのとき箱館の警護隊を秋田藩から派遣したほか、江差にも派遣の計画がありました。石川はこの頃に蝦夷地取締御用掛という職を勤めた人物です。大田や佐藤はこれらの幕府の動向を知り得る立場にありました。

幕府が静女の伝承に注目した理由や背景は今後詳しい研究が必要です。ここでは久喜地域に残る静女の伝承が幕府関係者に再発見され、広く知らされたこと、当時の江戸の人々は静女を通して義経を、あるいは義経北行伝説を思い出し、遠い東北や蝦夷地へ想いを馳せたであろうことを述べるにとどめます。

語り継がれる静御前の伝承



『静村郷土誌』（「久喜市栗橋町史資料2」）

静小学校訓導兼校長の中島寅之助が大正13年1月に編さんし、大正14年10月に出版。口絵には、「静女之墳」「坐泉の句碑」の写真が掲載され、本文でも旧蹟として静女の墳墓を紹介。

江戸時代後期に幕府によって再発見された静女の伝承は、その後も久喜地域で大事にされていきました。

明治十九年（一八八六）、東北本線に栗橋駅が新設されました。当時の駅舎は現在よりもやや北にあたります。

翌年の明治二十年（一八八七）、「静女冢碑」が、「静女之墳」の石碑の側に建立されました。ここには安政年間（一八五四～一八六〇）に杉の大木が枯死したこと、地元の柳沼氏が静女の伝承が失われることを危惧して墓域の整備を行ったこと、などが記されています。

明治二十二年（一八八九）には、市制・町村制の施行に伴う大規模な町村合併、いわゆる「明治の大合併」が行われました。このとき伊坂村は近隣の佐間村・松永村・間鎌村・高柳村・島川村と合併し、新しい村の名は「静村」と決まりました。この当時、静女の墓とその伝承は新たな地域統合のシンボルとして人々に受

『利根川図志 巻2』（国立公文書館蔵）

「静女舞衣」の部分。



け入れられたのでしよう。

大正十二年（一九二三）、静女の墓の維持管理と顕彰活動を目的とする静女古蹟保存会が結成されました。この頃から全国各地で歴史的な遺跡の保存や郷土史の研究が盛んになっていきました。保存会は現在も活動を続けています。

昭和四年（一九二九）に旧『埼玉県史』の編さん事業と連動して埼玉郷土会が結成され、会誌『埼玉史談』が創刊されました。その創刊号には岩井八郎さんの「静女の墓と伝説」と題する論文が掲載されており、当時の静女の墓が「カラタチの生垣」で囲まれていたと書かれています。

この論文は今まで全く語られてこなかった伝承を載せています。光了寺の縁記に登場する静女の侍女だった琴柱の墓の所在で、もとは栗橋駅の北にあったがその後消滅したとのこと。琴柱の墓については、安政二年（一八五五）の『利根川図志』で筆者あかまつ そうたんの赤松宗旦あかまつ そうたんが存在の可能性に触れた以外、記録などは一切見つ



久喜市指定史跡
「静御前の墓」(静御前遺跡保存会)
昭和53年3月29日に指定。

かかっていません。当時すでに存在していないので全く不明ですが、貴重な証言と言えるでしょう。

ここまで静御前の史実と伝説を行き交いつつ、久喜地域に伝わる静女の伝承を紹介してきました。これ以外にも、現在の久喜地域では静女に関するさまざまな伝承が見つかっているようです。ぜひ探してみてください。

伝承とは自然にできあがったものではなく、誰かが語り継いだものです。ある人物に関する伝説が語られるとき、その人物に対する何らかのイメージや想いが先に存在し、それが長い時間をかけて豊かになっていったと考えるべきです。

先に述べたとおり、静御前の人物像も時代によって変化してきました。久喜地域の先人にとって静女はどんな存在だったのか、人々は静女の伝承にどんな想いを寄せてきたのか、皆さんにも想いをめぐらせていただければ幸いです。

1 水野織部長福『結城使行 全』

結城藩主水野家の家老である水野織部（おりべ）長福（おさもと）（備後福山藩主水野家の出身）が、元禄16年（1703）1月に幕府から特命を受け、2月9日から2月20日にかけて、江戸と結城を往復したときの記録を、藩主水野日向守（ひゅうがのかみ）勝長（かつなが）に復命した書類。結城市史編さん準備室が編集して結城市が発行（昭和48年（1973）3月26日）したものを活用。引用文は、2月10日の往路の記事の一部。

2 松浦静山『甲子夜話 卷之七十八』

平戸藩主松浦（まつら）清が、文政4年（1821）11月17日の甲子の日の夜に、親友から勧められて筆を執り始めてまとめた随筆。正編だけで100冊あり、卷之百を書き終えたのは文政10年（1827）6月。平凡社の東洋文庫『甲子夜話』第5巻所収のものを活用。引用文は、寛政11年（1799）8月13日から8月20日にかけて江戸から日光を往復したときの記録で、8月19日の復路の記事の一部。

3 大田南畝『半日閑話 卷四』

幕臣大田南畝（なんぼ）が編集した随筆。卷十二（明和5年・1768）から卷十六（文政6年・1823）にかけての部分は、『街談録』の書名でも知られている。作成年が未詳ではあるが、「静女の墓印大杉」とだけあり、中川忠英（ただてる）建立の「静女之墳」のことが記載されていないことから、享和3年（1803）よりも前の古い情報と捉え、とりあえずこの位置に配する。『日本随筆大成 新装版』（吉川弘文館）第1期8所収のものを活用。

4 多紀元簡『日光駅程見聞雑記』

幕府の奥医師の多紀元簡（もとやす）が、日光を往復する際に見聞きしたものをまとめたもの。「今年五月、関東の郡代中川飛騨守、賞を捐て其事を石に勒して樹下に立となり」とある「今年」とは、享和3年（1803）のこと。早稲田大学図書館の古典籍総合データベースを活用。なお、埼玉県史料叢書13（上）『栗橋関所史料』242頁によれば、寛政6年（1794）1月から2月にかけて、多紀元簡が日光道中を往復している。

5 光了寺「静女蛙蟆竜儻衣畧縁記」

光了寺が発行した所蔵資料の縁記。資料8の縁記よりも古い縁記。末書きに「寄附のことを書き加えて再板した」とあり、文化5年（1808）の寄附のことが追記されていることから、同年5月以降間もなくの時期に発行されたと考えられる。国立公文書館所蔵「視聽草（続七集之九）」167を活用。

6 原念齋『許我志』

昌平坂学問所の儒者で古河出身の原念齋（ねんさい）が、歴史資料と古河藩士からの聞き取りによって、文化5年（1808）に編さんした古河の地誌。文政9年（1826）改版の縁記とは異なる古い縁記を引用。『古河市史 資料 別巻』（古河市）所収のものを活用。

7 佐藤一斎『日光山行記』

昌平坂学問所塾長佐藤一斎（いっさい）が、輪王寺（りんのうじ）法王の日光大祭に訪れるのに従って、文政元年（1818）9月11日から10月3日にかけて江戸と日光を往復したときの記録。『佐藤一斎全集』（明徳出版社）第2巻所収のものを活用。引用文は、9月13日の往路の記事の一部。

8 光了寺廿一世釈西明「静女蛙蟆竜舞衣畧縁記」

光了寺の21世釈西明が発行した所蔵資料の縁記。文政9年（1826）に改版されたもの。埼玉県立文書館所蔵の「足立家文書」825を活用。

9 松浦静山『甲子夜話 続編 卷之八十六』

資料2の続編で、正編と同じく100冊ある。平凡社の東洋文庫『甲子夜話 続編』第7巻所収のものを活用。引用文は、相摸年寄玉垣が、総州・房州・野州などを旅したときに得られた情報をまとめたもの。年次は未詳であるが、文政9年（1826）に改版された縁記を引用。

10 岡鹿門撰文「静女冢碑」

仙台藩出身の漢学者岡鹿門（ろくもん）が、明治20年（1887）に撰文した文章。碑の題額は長州藩出身の官僚杉孫七郎、書は滋賀県出身の官僚で書家として著名な巖谷修。石碑は一部破損が認められるものの、現在も「静女之墳」の側に現存し、静御前遺跡保存会が管理している。破損している部分の翻字については、古写真（42頁参照）を活用。

一 水野織部長福『結城使行 全』所収「江戸出発」抜粋

（前略）右に向かつてはるかに進むと、「すだち」というところがあります。文字では「杉立」と書いて、「すだち」と読みます。ここには、古い杉の木が今も残されています。この木は、源頼朝公が鎌倉で静御前の舞をご覧になった後、彼女への褒美に旅をさせたところ、この地に亡くなるまで住みつけ、その墓のしるしとして植えた杉とも、また、彼女を隠しておいた場所で、彼女が亡き後そのことのしるしとして植えた杉とも言われています。どちらの説が最初に言い出されたのかは、よくわかっていません。その杉の木の後ろには小社があり、一言宮と言われています。（後略）

二 松浦静山『甲子夜話』所収「巻之七十八 日光道之記」抜粋

（前略）早いもので、もう中田に着きました。この宿場には光了寺というお寺があります。その寺の門前に、「静御前の旧跡」と書かれた案内板が建っています。どんなゆかりがあるのか立ち寄って拝観したいと考えていたのですが、私は人一倍舟に乗るのが苦手なうえ、今朝から吹きはじめた風の音が怖くて、少しでも早く利根川を渡りたかったので、この旧跡は人を残して訪ねさせ、私は急いで利根川のほとりまで向かい、今日はここで失礼させていただきますと考えて小舟を寄せ、その舟に乗って渡ろうとすると、降り続いた雨で増水した水が上流までやってきて、川上から猛烈な勢いで下ってきます。底も深いので、櫓を漕いでやっと渡りました。栗橋の関所

が、この場所に設けられたのはもつともなことです。対岸の陸地に上がってようやく心が落ち着き、ここから輿に乗って進み、関所では輿の戸を開けて通りました。こうして午前十時頃に栗橋宿の本陣池田由右衛門の家で休憩した後、昼食をとりました（この家は古いけれどせまくはなく、庭も開放感があつて、きちんと掃除もされていたので、今までになく落ち着いて過ごせました。この時、光寺を訪ねさせた者が追いついてきたので、どうだったと聞いたら、「静御前が帝から下賜された舞衣があるとのことでした。拝見すると、年代ものの一片の衣だけが残されていて、薄絹に色々な糸で模様が刺繍されていたのですが、今はほとんど無くなって、山の形と雲や鶴などが残っていました。また、義経ゆかりの品ということ、長さ二十七センチメートル程で縋理・平一面の短刀もありました。柄も鞘も既に無くなっていますが、

素鞘に納めてあります。刀身には金の金具がついています。この刀身は昔からのもので、鞘は後に付したものと思われ「ます。」と答えてくれました。ほかにはと聞いたら、「静御前を葬ったところがあるとのことでした。栗餅を売っている家の辺りから道を少し入っていくと、墓のしるしとなるような石はなく、ただ杉の木一本が立っていて、大きさは成人男子七人で囲うことができる幹周りほどもあるだろうと僧侶が話してくれました。」と答え、それを聞きながら残念に思っていました。が、近い場所なので再び来ることもあるだろうと考えて出発したところ雨が降ってきました。川を渡っておいで良かったと安堵しながら、今日は利根川を左手に見て進んで行きながら途中で地元の人に尋ねてみると、静女のしるしの杉の木は、中田ではなく、この地にあると教えてくれました。（後略）

三 大田南畝^{なんぼ}『半日閑話』所収「巻四 静女の事」

岩松山光了寺（東本願寺末寺。総州中田駅のはずれにある）。この寺に「静女の舞衣」というものがあります。

生地は黒く、織物で、日・月・山・龍といった模様があります。下袴の模様は獣だということです。ただ大変古いものなので、上衣だけは確認することができたのです。下袴は触ることもできませんでした。静女の護身刀は白い鞘で、袋は赤地に金襴が施されています。静女の法号は「岩松院妙源大姉」といい、文治四年九月十五日に亡くなりました。栗橋宿から右手に八百メートルほど進んだところの宝治戸というところに静女の墓のしるしの大杉があり、幹の大きさは成人男子十人で囲うことができる幹周りです。そばには小社があり、一言社とい

ます。一言の池が埋まって田んぼになったところでは

別当には、真言宗経藏院があります。中田の左手四キロ

メートルほどのところに静ヶ谷村があります。静女が奥

州に下向した際、この地で高館の落城を聞いて戻ったと

ころなので、静婦と言う意味の名になったということ

です。栗橋宿の右手には浄土宗深廣寺（増上寺末寺）が、

土手の上り口の左手には会津の人が尊崇しているとい

会津稻荷（由緒はわかりません。）があります。右手に

八百メートルほど進んだ川通りには大きな柳の木があり

ます。だいたい成人男子四〜五人で囲うことができる幹

周りでしょうか。地元では、静女の楊枝の柳という言い

伝えがあります。

四 多紀元簡もとやす 『日光駅程見聞雜記』 所収 栗橋「中田」抜粋

栗橋（中田まで約二キロメートル。六百五十メートル。四百戸。）

（前略）宿場の西の方角に百十メートルほど進んだ伊坂村宝治戸というところに、静御前の墓のしるしの杉の大木があります。静御前は、源義経の後を追って、ここにやってきました。しかし、義経が奥州の高館で戦死したと聞き、悲しみのあまり病気にかかり、お亡くなりになったので埋葬した場所と伝えられています。近くには一言宮という小祠もあります。杉の木の高さは約二十メートル、張りは約二十七メートル、幹周りには約七メートルほどです。今年の五月に、関東郡代中川忠英なかつらがお金を出して、「石に「静女之墳」と彫らせた

碑を造り、この杉の木の下に建てられたということですよ。

中田（古河まで約六キロメートル。下総国葛飾郡。五百五十メートル。百戸余り。）

（前略）また、宿場の西の方角に岩松山聖徳院光了寺という浄土真宗のお寺があります。静御前が後鳥羽上皇から下賜された舞衣を所蔵しています。舞衣の生地は紗のように厚く、模様は刺繍と切付の両方がかたどられ、非常に古い中国製のものと思われます（図を下に示します）。（中略）また、義経公ゆかりの木の鏡二点、短刀一点など、そのほかにも寺宝があります。詳しいことは寺の縁記に書かれています。

（中略）ほどなくして光了寺に至ると、静御前の墓が川向こうの宝治戸というところに在るよと住職が言うので、その土地の文字を尋ねたところ、「ほう」

は「むろ」とも「たから」とも読む字だと答えてく
 れました。恐らく、草書では、「宝」と「室」の字
 が似ているので、そうお答えになったのでしょう。

（中略）

茶屋新田

ここから東の方角に百十メートルほど進むと南側に逸
 見村と大堤村の両村があり、二つの村の境には上水が
 流れています。そこに掛けられている土橋を、静御前
 の思案橋と言います。静女が義経公の後を追ってこの
 橋まで来ました。奥州に行くべきか、京都に引き帰す
 べきか思案した場所だと伝えられています。（後略）

五 光了寺「静女蛙蟻竜儂衣畧縁記」抜粋

一 下総国葛飾郡中田宿にある岩松山聖徳院光了寺は、
 かつては武州高柳村にあった高柳寺という天台宗のお寺
 でした。建保年間にこの地にいらっしゃった親鸞聖人の
 御弟子となった当寺の住職が、西願という法名を与えら
 れ、浄土真宗光了寺と改めたのが現在の当寺になります。
 西願は、後鳥羽上皇の北面の武士の土岐又太郎国村の次
 男で、出家して権大僧都法印円崇と名乗っていました。
 親鸞聖人の御弟子となって、当寺の開基となった人物で
 す。

一 静女は、日本に並ぶものない舞上手で、源義経卿
 の思い人でもあります。後鳥羽上皇の治世中のある年に
 大早魃があり、あらゆる草木が枯れ果てて、国民の不安
 をおさめることが難しくなっていました。そこで、名の

ある僧侶たちにお出ましいただき雨乞い祈願を行いました
 たが、効果はありませんでした。公卿たちが詮議した結
 果、百人の舞姫を集めて、神泉苑の池で法楽ほうらくの舞を行わ
 せることにしました。九十九人まで舞い終わりましたが、
 雨は一向に降る気配をみせません。百人目の静女が舞い
 はじめようとしたとき、御簾みすの中から御衣の下賜があり
 ました。そこで静女は恐れ多いこととかしこまりながら
 その衣を着て舞い始めると、とたんに激しい雨が降って
 きました。この時の衣が、当寺に伝わる舞衣です。名づ
 けて蛙蟻あまりよら竜の舞衣といいます。義経卿は、頼朝公のお怒
 りに触れ、落武者となりました。静女は、義経卿の思い
 人なので、鎌倉に呼び出され、義経の行方を尋ねられた
 けれども、知るわけもないのでお暇をいただきます。静
 女は義経卿が東国に隠れ住んでいると考えていました。
 幸いこの鎌倉までやって来たのに、このまま京都に帰る

のも残念なので、さらに義経卿の行方を尋ねようと、侍
 女琴柱ことじと一緒に下総国下辺見というところまでやってき
 ました。そこで、道行く人々に義経卿の行方を尋ねてみ
 ると、「先ごろ奥州の高館でお亡くなりになられたようだ。」
 という話しを聞き終わらないうちに、静女は服の袂たもとを涙
 で濡らし、誰にもすぐることさえできない世の中で、ぜ
 ひ陸奥まで訪ねて行こうと考えていたのに、思いも叶わ
 ず、こんな世でもまだ生きながらえなければならぬの
 であれば、いつそ寺に入って尼となり、義経卿の菩提を
 弔おうとして橋を（下辺見村の思案橋はこの橋のことで
 す。）越えて、前林というところにたどりついたところ
 で、ここまで尋ねてきた証として柳の枝を結んだ後に、
 京都の方に向って歩きはじめたのです。それで、ここを
 静婦と言うのです。当寺より三・三キロメートルほど東
 に行ったところに、枝を結んだ柳が今も残っています。

そこから利根川を越え、伊坂というところについたところで、ただでさえ秋は物寂しいというのに、旅の疲れと、どんなに思っても無常の世の中であることが重なって、遂にあの世へと旅立たれてしまいました。琴柱は涙を流しながら当寺に葬り、墓のしるしに一本の杉の苗を植えました。現在一本杉といっている木のことです（幹周りは六メートル余り）。栗橋宿の裏にあたる伊坂村にあります。本尊と頂戴した御衣、それに義経卿形見の懐剣は、すべて当寺に納まり、寺の寺宝として今に至っています。ます。

一 鑑 義経卿が奥州下向の際に預けられたものです。
 （中略）

一 阿弥陀如来 静女の守り本尊で、第三代天台座主えん仁にの作です。

右に記したもののほかは省略します。

当時御寄附いただいたものの一覧

一 寛政十二年（一八〇〇）九月に、陸奥白河藩主松平定信侯が御高覧の上、近臣者から内箱・外箱を御寄附いただきました。

一 文化五年（一八〇八）五月に、出羽久保田藩主佐竹よしまさ義和侯が御高覧の上、近臣者から御袱紗ふくさ一張を御寄附いただきました。

一 文化四年（一八〇七）四月に、中川忠英侯が御高覧の上、御袱紗一張りを御寄附いただきました。

六 原ねんさい念ご斎『許我志』所収「静女」抜粹

中田の光了寺に、源義経の愛妾静御前ゆかりの品で、後

鳥羽上皇から下賜されたという雲竜の模様が刺繍されている舞衣と、白木で作られた源義経ゆかりの双鏡、それとその護身刀を所蔵しています。特に舞衣は、様々な方が欲しがるので、三ミリメートル四方または三センチメートル四方を切りとって与えることがあるということです。

光了寺は、もとは幸手の高柳村に在ったので、高柳寺と称していました。ここには静御前の墓もありました。源義経の行方を追いかけて、奥州に向う途中、ここで亡くなったのでしよう。今もその墓のしるしになっている杉の木の下に九十センチメートルほどの古碑があります。

この碑の正面には、蓮華の上に梵字を刻み、その下に「光明遍照 十方世界 正元元年己未十月日 念仏衆生 撰取不捨」の文字を三行にわたって刻んでいるだけで、静御前のことは全く書かれていません。しかし、伝承ではこれを静御前の墓と言っています。最近、中川忠英が

「静女之墳」と刻んだ新碑を別に建てられたということ。高柳寺は、何時ごろ、どういった理由で、幸手から中田に移ったのでしょうか。また、高柳を光了に改めたのかについても、私はまだよくわかりません。

(後略)

* (貼紙) 息子の扱が謹んで申し上げます。高柳を光了と改めたのは、この寺が出版した「静女竜衣の縁起」に書かれています。(後略。前出資料五参照)

七 佐藤一斎『日光山行記』所収「文政元年九月十三日条」扱

十三日。雨ときどき晴れ。午前二時頃出発します。駕籠が揺れるので、眠ったり起きたりということを繰り返し

ます。東の方角が白やんできたころ、堤に沿って進みます。堤の外側は利根川です。ちょうど帆柱が見えました。栗橋宿に着きます。関所があり、ここが武州と総州の境界にあたります。関所の南にある伊坂村に、静女の墓があります。たくて大きな根が露出する古い杉の木です。

大きさは七十メートルほど、高さは九百メートルほどです。枝は四方八方に大きく伸び、幹は中が空洞になっています。試しに鋸のこぎりで根っこを引いて、臭いをかいでみると、激しい臭いを発します。恐らく六百年以上は経っている物と思われます。利根川を渡ると中田宿です。宿場の北にある光了寺は、静女の菩提寺です。舞衣一領、護身刀一振、馬鎧一双を所蔵しています。舞衣は紺色の絹地に、肩の背には日・月・北斗七星・蓬莱・雲・鶴などが刺繍されています。後鳥羽天皇から下賜された物と伝えられています。真偽ははっきりしていません。

す。護身刀は鑄さびが非常に進んでいます。馬鎧は一木いちぼくを削って作ったもので、木の種類は楓かえでの類、俗に武蔵鎧と呼ばれているものです。源義経の形見と伝えられています。疑問のあるところです。寺は、もと伊坂村にあつて、後にこの地に移ったのです。（後略）

八 光了寺廿一世釈西明「静女蛙蟻竜舞衣畧

縁記」抜粹

一 静女の舞衣は、下総国葛飾郡中田宿にある岩松山聖徳院光了寺に所蔵されています。この寺は、かつては武州高柳村にあつて高柳寺といい、天台宗のお寺でした。建保年間けんぽうねんかんに、親鸞聖人が当地にいらっしやいました。その時の住職が、後鳥羽上皇の北面の武士の土岐又太郎国

村の次男で、出家して権大僧都法印円崇と名乗っていた人物でしょうか。親鸞聖人の御弟子となって、西願という法名を与えられ、浄土真宗了了寺と改めます。その後、寺をこの地に移したのです。

一 静女は並ぶものない舞上手で、源義経の思い人でもあることは、世に広く知られているところです。後鳥羽上皇の治世中のある年に大旱魃があり、あらゆる草木が枯れ果てて、国民の間に不安が広がっていました。そこで、名のある僧侶たちにお出ましいただき雨乞い祈願を行いました。効果はなく、公卿たちが詮議して百人の舞姫を集め、上皇も神泉苑にお出かけになった上で、法楽の舞を行わせました。九十九人まで舞い終わりましたが、雨は一向に降る気配をみせません。最後に静女が舞いはじめようとしたとき、恐れ多くも御簾の中から御衣が下賜されました。そこで静女がこの衣を着て舞い始

めると、とたんに激しい雨が降ってきたとのことです。

これが、蛙蟻竜の舞衣と言っているものです（この御衣を、あま龍の舞衣と呼ぶのは、どういう理由からなのかわかりません。御衣の紋にあま龍のような形があるからなのでしょう）。義経は、頼朝卿と不和になり、落武者となりました。静女は、義経の思い人なので、鎌倉に呼び出され、義経の行方を尋ねられたけれども、知るわけもないのでお暇をいただきました。その後、義経が東国に隠れ住んでいるといううわさを聞き、その行方を追って侍女琴柱と一緒に、下総国下辺見というところまでやってきました。そこで、道行く人々に義経の行方を尋ねてみると、「先ごろ奥州の高館でお亡くなりになられたようだ。」という話しを聞き、悲しみに耐えられなくなります。どうしても陸奥まで訪ねて行くというだけの甲斐もなくなってしまうので、今さら俗世に留まるより

も、むしろ寺に入って尼となり、菩提を弔おうとして橋を（下辺見村の思案橋はこの橋のことです。ここで静女が思い悩んだことから名づけられたと言われていきます。）越えて前林というところにたどりついたところで、ここまで尋ねてきた証として柳の枝を結んだ後に、京都の方向に進路を変更したということです。ここを静婦と言います（当寺より三キロメートルほど東に行ったところに、今も結んだ柳の枝があります）。それから利根川を越え、伊坂というところについたところで、ただでさえ秋は物寂しいという時期に、深い嘆きに包まれて、旅の疲れも増したのでしょうか。あつけなくあの世へと旅立たれてしまいました。琴柱は涙を流しながら火葬して、墓のしるしに一本の杉を植えました。現在一本杉とっているのは、このことです（幹周りは六メートル余り。栗橋宿の裏にあたる伊坂村にあり。当寺から十メートルほど。）。

静女が亡くなる直前まで手にしていたこの舞衣と守り本尊、それに義経の形見の懐剣は、菩提を弔うために当寺に納め、寺宝として今に至っています。

一 蛙蟆龍舞衣 別に図を出します。

一 形見懐剣

一 守本尊阿弥陀如来 第三代天台座主円仁の作です。

ほかの寺宝は、左のとおりです。

一 鐘 義経が奥州下向の時に預けていったものです

（この品が、静女ゆかりの品と同じように、当寺にあるのは偶然としか言いようがありません。）。

（中略）

一 右の静女の舞衣は、昔から当寺に所蔵されていますが、これをご覧になりたいという人はそれほど多くありませんでした。しかし、学問が盛んになってきた近頃では、このような古いものに対する興味を持つ人も増えて

きたのではないでしょうか。最近では、当宿場を通行する方のうち、高貴な方から庶民に至るまで、様々な方々から詳しく拝見したいという申し出が少からず増えてきました。しかし、貧しい寺なので、箱や袱紗のようなものが古いままで、お見せできるような状況ではなく、そうかといって新しいものを求めるわけにもいきません。

最近、御寄附をいただき、誰にお見せしても恥ずかしくない状態になりましたので、御寄附いただいたものを、左に記しておきます。

一 内箱・外箱（寛政十二年（一八〇〇）九月に、陸奥白河藩主松平定信侯が、近臣者に命じて御寄附いただいたものです。）

一 袱紗一張（文化四年（一八〇七）四月に、関東郡代中川忠英侯から御寄附いただいたものです。）

一 袱紗一張（文化五年（一八〇八）五月に、出羽久保

田藩主佐竹義和侯が、近臣者に命じて御寄附いただいたものです。）

一 縁記表装・二重箱・袱紗など（文政六年（一八一三）十一月に、勘定奉行石川忠房侯から御寄附いただいたものです。）

右のほか、最近、江戸歌人の清水濱臣や小林良幹などが主催して、舞衣に関する詩歌を集め、一冊にまとめて当寺に納めてくれました。このほかにも、遠い近いに関係なく、好奇心のある方々が、次々と詩歌等を寄せてくれて、年を重ねても絶えることがありません。こういうわけで、静御前ゆかりの寺ということについても、目を追って知られるようになってきていることは、本当に有り難いことです。

古来の縁記を記した板木が年を経て磨滅し、読みにくくなってきたので、今回、若干の誤字等を訂正した上で、

この末文を加えて、新しい板木で作成したものです。

九 松浦静山『甲子夜話 続編』所収「巻之

八十六 一 下総国光了寺什物、静女白拍子

舞衣之事并墳墓石碑之図 ○静之事〔寛政〕日

光道之記』考』注付』抜粹

私のお抱えの相撲年寄玉垣が、仕事で総州・房州を経て野州に戻ってきた際、私に玉垣自身が書いた小録を見せてくれました。玉垣は撰州の生まれで、その職業からは思いもよらず、学問にも強い関心を持っています。私が、日ごろから古い舞人を研究していることを知っていたので、調べてくれたようです。

「下総国葛飾郡古河の辺りの中田村光了寺は、浄土新

宗で、寺室に「静御前白拍子の舞衣」があります。蝦夷

夷錦でじまきといわれるもので、胸には金糸で日・月の紋が織

られています。ほかにも約二十九センチメートルの懐

剣などの品物があります。このことが松平定信侯のお

耳に入り、寛政十二年にご覧になりました（侯は老

中を退かれた後で、藩主として白河領内を巡視してい

たときのことです）。この古い舞衣の片袖を持ち帰り

たいと願い、その一部を持っていかれました。その代

わりに白川侯の御紋の入った御袱紗と、二重箱に侯の

お名前を記して寄附されました。」と書いてあります。

この舞衣は、私も数年前の日光参詣の際に、この寺が街

道沿いだったので立ち寄って詳しく拝見しました。蝦夷

錦ではなく、薄手の織物だと思います。ただ、刺繍の様

子からは、中国製のものではないだろうかと思えます。

後に、光了寺の普及活動の一環で、これらの品物を江戸

に持ち運んだこともあり、その際もあらためて拝見したので、今度は詳しく模様などの図柄を紙に書き写しておいたのですが、今どこにあるかわからなくなってしまいました。見つかりたいと思います。

また、松平定信侯が御寄附された袱紗も拝見しました。玉垣の言うとおり、薄紫に白紋字です。このほかのことは、私の『日光道記』の文章に記しておきました。（後略）

前出資料二参照）

また、光了寺で出版した縁記には、（後略）前出資料五参照）

「中田村と古河との間に、思案橋という橋があります。静御前が奥州を訪ねる際に、思案した場所ということですので、この後、武州葛飾郡栗橋のはずれの伊坂村でお亡くなりになったということです。埋葬した塚のしるしということ、大きな杉の木があります。太さは私の

五廻り半で、大体九十センチメートル程度です。（私の五廻半とは、自分の手で五人分という意味です）」と書いてあります。

このように、ほかにも玉垣が記したものがありません。特に必要ないものではありませんが、わずかの期間で変わったところもあります。私がこのあたりが違っていたと感じたので、ここにとりあえず筆写しておきます。（後略）

十 岡鹿門撰文「静女塚碑」

栗橋駐車場の東から百歩のところ古い塚があります。舞姫静御前の墓とされています。「静女が、鎌倉から逃れ来て、義経が陸奥にいと聞き、侍女一人を伴って、ひそかに関東に下り、ここまで来た時に、義経が殺され

ていると聞き、泣き崩れてそのまま息絶ええました。村人はこれを憐れみ、高柳寺の僧にお願いして経をあげてもらって葬りました」と言われています。この高柳寺は、後に中田に移って光了寺と改まりましたが、静女の錦の舞衣が納められています。伝えによると、後鳥羽法皇が都の神泉苑で雨乞いをされた時、舞いを奉納した静女に賜ったものだとのことです。墓の側に杉の老木があり、その影の大きさは二十メートル近くの広さを覆うほどのものでした。しかし、安政年間あんせいに倒れてしまいました。里の豪族の柳沼氏が、墓地の由来がわからなくなるのを恐れて、この周りに柵を建て墓域を明らかにし、さらに碑を建てようとして私に撰文をさせました。静女は、歌舞を生業とする女性でしたが、千年もの長い間、歴史家たちによってその事蹟を大きく伝えられてきました。そのほか詩や歌にも詠まれ、絵にも描かれ、子どもや女性

でも、それを昨日のことのようにはつきりと知り、ほめたたえています。それはひとえに静女がどんな苦難に遭って落ちぶれても、義経に対する一途な気持ちを変えなかつたからではないでしょうか。そもそも義経は源氏の大軍を率い、部下の猛将やつわものたちも、その指揮に従い先を競って奮戦し、他人に負けまいと励みました。ところが、一旦兄の頼朝に疑われ、義経が追放され罪人になると、今まで忠実な部下だった猛将やつわものたちは掌を返すように義経を捨てて敵にまわってしまいました。このため、追われる義経に最後までつき従ったのは、わずかに十数名にしかすぎませんでした。そんな哀れななか、静女はかよわい女性でありながら、頼朝に捕らえられても、その面前で吉野に逃れた義経への思慕を告げ、その思いを「おだまきの歌」に託し、たとえ命を奪われようとも何とも思わぬという強い意思を示しました。天

下人である右大将頼朝の力をもってしても、彼女の意思を屈服させることはできませんでした。あの、かつて義経の武将となつて長槍を揮^{ふる}い大馬に乗つて、「百夫の雄」をもつて自ら任じていたつわものどもが、権力の前に味方になつたり敵になつたりして節操がなく、ただ己の利益だけに終始しているのを目の当たりにすると、静女の毅然として貞操を守る様子を見て、顔を赤らめないでいられるでしょうか。こう考えると、今日に至るまで静女が人々に褒め称えられていることが当然だということがわかるでしょう。私は、明治二十年に柿沼氏を訪ね、光了寺に立ち寄り、静女のもと伝えられる錦の舞衣を見て、往年の静女のでやかに化粧をして義経との別れの曲を唄い、頼朝夫妻の顔色を変えさせた立派な姿を思い、心に強く打たれる思いがしました。そこで歴史上の静御前の逸話を述べた上で、次のような銘文を作りました。

静御前が吉野山に雪を踏んで歩み入れば義経のことを思つて涙を流し、その想いをおだまきの歌曲に託して静女が唄えば心中は麻のように乱れます。静女は、この地にその玉のような美しい心を埋めて世を去つてしまいました。もはや時の流れが返ることはなく、青々とした草には風雨がかり落花が舞うだけです。もしこの場に義経がいたならば、かつて楚の項羽が追い詰められて愛姫の虞美人を「虞や虞や汝をいかんせん」と嘆いたときと同じことを思うことでしょう。

○ 『吾妻鏡』にみる静御前関係略年表

和 暦	西暦	事 項
文治元年	1185	・都落ちした源義経一行に同行する。 ・吉野山でとらえられる。
文治 2 年	1186	・母親の磯禪師とともに鎌倉に送られる。 ・頼朝の命により鶴岡八幡宮で舞を舞う。 ・義経の子を産む。子は男子であったため、頼朝の命で殺される。 ・母親の磯禪師とともに京都に帰る。
文治 3 年	1187	・源義経が奥州に落ち延びる。
文治 5 年	1189	・源義経が衣川館で自害する。

○ 久喜市の静御前伝承関係略年表

和 暦	西暦	事 項
元禄16年	1703	・結城藩家老水野織部長福が結城に向う途次「杉立」を通る。
寛政11年	1799	・平戸藩主松浦静山が日光参詣の帰途「中田宿」「栗橋宿」を通る。
寛政12年	1800	・白河藩主松平定信が光了寺に「内箱・外箱」を寄附する。
享和 3 年	1803	・関東郡代中川忠英が「静女之墳」碑を伊坂村に建立する。
文化元年	1804	・伊坂村出身の俳人奈良坐泉の句碑が同村に建立される。 ・幕府の奥医師の杉本樗園が「静女舞衣の記」を詠む。
文化 4 年	1807	・関東郡代中川忠英が光了寺に「袂紗」を寄附する。
文化 5 年	1808	・秋田藩主佐竹義和が光了寺に「袂紗」を寄附する。 ・昌平坂学問所の儒者で、古河出身の原念斎が『許我志』を編さんする。同書には、文政9年に改版されたものとは異なる縁記が引用されている。
文化12年	1815	・光了寺に「祖師聖人並静女舊跡」の標柱が建立される。
文政元年	1818	・昌平坂学問所塾長佐藤一斎が日光に向う途次「栗橋宿」「伊坂村」「中田宿」を通る。
文政 6 年	1823	・幕府によって、葛飾郡の地誌調査がはじめられる。 ・勘定奉行石川忠房が光了寺に「縁記表装・二重箱・袂紗等」を寄附する。
文政 9 年	1826	・光了寺の「静女蛙蟆竜舞衣畧縁記」が改版される。
天保元年	1830	・『新編武蔵國風土記稿』がまとめられる。
天保12年	1841	・戯作者為永春水が『閑窓瑣談』を出版する。
安政2年	1855	・赤松宗旦が『利根川図志』を執筆する。
明治20年	1887	・岡鹿門撰文の「静女冢碑」が建立される。
大正14年	1925	・中島寅之助編『静村郷土誌 全』が発行される。



静女冢碑（『光了寺記念絵はがき』・個人蔵）

この写真は、大正7年から昭和8年までの間に発行された『光了寺記念絵はがき』の中の一
枚。現存する碑は一部欠損しているため、撰文全文が明らかにできる資料として貴重。実在
の碑陰には、建碑資金を負担した人の村名、金額、名前が刻まれている。

一 水野織部長福『結城使行 全』所収「江戸出発」抜粋

（前略）右に遠くすだちといふ所有。文字に杉立と書

て、すだちとよむ。古よりの大杉今にあり。是は頼朝公¹がまくらにて、しづか²が舞御覧の後御ほうびとして此所をたびて、しづか³ご⁴にすみて命をはりける。そのはかするしに植たる杉とも、又はしづかを爰にかくし置たる所也。しづかなき跡の印とて植しともいふ。いづれの説よりいひ出しやおぼつかなし。その杉のうしろに小宮あるを一言宮⁴となんいふとぞ。（後略）

【注】

1～源頼朝。2～静御前。3～静御前。4～現在の一言神社

（久喜市栗橋中央二丁目一〇四六。以下同じ。）

二 松浦静山『甲子夜話』所収「巻之七十八 日光道之記」抜粋

（前略）途¹はや中田²に到³れり。此⁴駅のうちに光⁵寺⁶といふあり。其⁷寺の門前⁸に静御前⁹の旧跡¹⁰と書¹¹たる牌¹²をたてたり。いかなる迹¹³にやたちよりて覽¹⁴ばやと思¹⁵しが、余舟¹⁶に懼¹⁷ること人に絶¹⁸て、今朝¹⁹よりの風²⁰の音²¹愁²²苦²³く思²⁴たれば少²⁵も速²⁶く川²⁷を渡²⁸らんと、この旧跡²⁹は人を留³⁰て尋³¹させ、余は急³²行³³て利根川³⁴の浜³⁵に到³⁶に、けふは此³⁷ほどと辞³⁸したりしによりて小舟³⁹よせたれば、うち乗⁴⁰て済⁴¹に、降⁴²つゞきし雨⁴³に水⁴⁴まして向⁴⁵なる方⁴⁶にいたれば、

川上より漲くだる勢猛かりし。水底も深ければ櫛⁴こぎて渡れり。げにも栗橋の関⁵此⁶淵にす糸られたりと。こなたの岸に上り心を安じ、ここより輿に乗、関にて輿の戸あけ、うち過て日⁷の刻はかりにや、栗橋の駅舎池田由右衛門の家に休、こゝにて昼餉す「此家は古くせまくもあらず。庭もうちひらけ、すべて掃除などしたれば、これまでになくやすきおもひしたり」。此時光了寺に遣たりし人返来ければ、いかにと聴に、静か帝より賜し舞衣とてあり。年古てたゞ一片の帛のみあり。羅にいろいろの糸もて紋繻たりしが、今はみなおち去て山の象雲鶴など残り。又義経の与たるものとして、長九寸¹⁰もあるべき纒理にて平一面なる短刀あり。柄も鞘もなく素鞘にこめたり。身には金の脛巾をかく、これは昔の遺ものにて鞘は後のものと見ゆ。又間、静御前を葬し所とてあり。栗餅うる

家のほとりより岐てわづかに入。墳の墓石¹¹こてはなく、たゞ杉一樹立たり。大さ七畝¹²ばかりもありなんと僧の語たると云など聞て、のこり惜く思たるが近き辺の国なれば再つてもこそ有めとこゝを立出るに、雨ふり出たり。能ほどにこそ川は渡たれとけふは川を左に見て行に、こゝにて聞は静女のしるしの杉は中田にはあらで此ほとりに在といひたり。（後略）

【注】

- 1 茨城県古河市中田。2 真宗大谷派の寺院（茨城県古河市中田一三三四番。以下同じ）。3 現在は文化十二年建立の「祖師聖人並静女舊跡」の石碑あり。4 正しくは櫛。
- 5 栗橋関所（房川渡中田関所）。6 現在の午前十時から正午までの二時間。または午前十時頃。7 栗橋宿の本陣。8 静御前。9 源義経。10 一寸は約三・〇三センチメートル。
- 11 成人男子七人が両手を左右に広げて囲える幹周り。12 利根川。

三 大田南畝『半日閑話』所収「巻四 静女の事」

岩松山光了寺〔東本願寺¹末上州²中田驛ノハヅレニアリ〕。此寺に静女の舞衣有^レ之、地黒く織物にて模様日月山龍なり。下袴摸様獸の形の由、至て古く上衣計にて下袴手にとられず。静女の守刀白鞘にて袋赤地金欄、静法號岩松院妙源大姉、文治四年九月十五日³。栗橋宿より七八町⁴右の方へ入寶地渡村⁵に静女の墓印大杉十圍⁶に及ぶ。側に小社あり、一言社⁷といふ。一言の池埋りて田地となる。別當眞言京藏寺⁸。中田の左一里計⁹に静ヶ谷といふ村あり。奥州下向の時、静女此處にて高館¹⁰落城を聞立歸りしより、静歸りと云心なりとぞ。栗橋宿の内右に浄土宗ジソクハン寺¹¹、〔増上寺¹²末〕土手上り口に左會津稻荷¹³、〔來田不^レ

知〕會津の人尊敬の由。右七八町過川通り大柳有り。凡四五抱¹⁴に見ゆる。俗説に静が楊枝の柳と云傳り。

【注】

1 真宗大谷派の本山（京都府京都市下京区烏丸七条）。2 正しくは総州。3 『吾妻鏡』によれば、義経の没年は文治五年閏四月。4 一町は約一〇九・〇九メートル。5 正しくは伊坂村宝治戸。6 成人男子十人が両手を左右に広げて囲える幹周り。7 現在の一言神社。8 現在の眞言宗豊山派経蔵院（久喜市栗橋北二丁目一四番一六号）。9 一里は約四キロメートル。10 岩手県西磐井郡平泉町高館にあったとされる奥州藤原氏の居館。衣川館または判官館ともいう。11 浄土宗深廣寺（久喜市栗橋東三丁目七番二四号）。12 浄土宗の大本山（東京都港区芝公園四丁目）。13 久喜市栗橋東六丁目にある「会津見送り稻荷の内殿及び御神体」は市指定史跡。14 成人男子四、五人が両手を左右に広げて囲える幹周り。

四 多紀元簡『日光駅程見聞雜記』所収「栗

橋」「中田」抜粋

（原文は句読点なし。参考のため付す。）

栗橋〔中田へ半里¹。六丁²。戸四百〕

（前略）宿の西十町程入りて伊坂の内宝治戸³といふ所に静の墓印の杉の大木あり。静御前、義経⁴のあとを逐ひ此所に来り。奥の高館⁵にて戦死すと聞て、俄に病て死たるを葬りしとなり。其下に一言の

宮⁶。とて小さほこらあり。杉高六丈七尺⁷、張り十五

間⁸、圍二丈三尺。今年⁹五月、関東の郡代中川飛騨守¹⁰、賢を捐て其事を右に勅して樹下に立となり。

中田〔古河へ一里半。下総國葛飾郡なり。五丁。戸百余〕

（前略）又宿の中、西の傍に岩松山聖徳院光了寺¹¹といふ一向宗の寺あり。静御前、後鳥羽院¹²より賜

ハリたる舞衣を蔵む。地ハ紗のごとくにて厚く、模様ハ縷と切付と両様交りて至て古き唐物と見ゆ〔圖下¹³に出す〕。（中略）また義経の木鐙二、短刀一、其外靈宝あり。詳に寺の縁起に見ゆ。

（中略）無程此光了寺に至りしに住僧の静の墓ハ川向なる宝治戸といふ所にありといひしゆへ、其文字を問に、ほうハむるとも又たから共読字なりと答ふ。草字にてハ宝室に作るゆへ、かくハ云しならん。（中略）

茶屋新田

是より東の方十町余行ハ南に逸見村¹⁴と大堤¹⁵といふ両村の間に上水¹⁶あり。其所にある土橋を静御前の思案橋といふ。静¹⁷、義経の跡を慕ひ、此所に来り。奥州へ行んや止んやと思案せし所なりといひ傳ふ。（後略）

【注】

1～一里は約四キロメートル。2～一町（丁）は約一〇九・〇九メートル。3～伊坂村宝治戸。4～源義経。5～岩手県西磐井郡平泉町高館にあつたとされる奥州藤原氏の居館。衣川館または判官館ともいう。6～現在の一言神社。7～一丈は約三・〇三メートル。一尺は約三〇・三センチメートル。8～一間は約一・八二メートル。9～享和三年。10～中川忠英。11～真宗大谷派の寺院。12～後鳥羽上皇。13～十五頁左十号真参照。14～現在の茨城県古河市下辺見。15～現在の茨城県古河市大堤。16～現在の向堀川。17～静御前。

五 光了寺「静女蛙蟆竜儼衣畧縁記」抜粹

（原文は句読点なし。参考のため付す。）

一 下総國葛飴郡中田宿岩松山聖徳院光了寺¹八住昔武州高柳村²にあり。高柳寺と号し天台宗也。建保年中³宗祖親鸞聖人入御まし〜御弟子と成、法名西願と下され、浄土眞宗光了寺と改号せり。西願ハ 後鳥羽院⁴の北面土岐又太郎國村の次男。出家して權大僧都法印圓崇と云。聖人御弟子、當寺開基也。

一 静女八日本無双の舞の上手、源義経卿思ひ人なり。然に

後鳥羽院の御宇一とせ大旱魃して、料草連枝も枯果、國民の愁安からず。依之責僧高僧を召れ雨乞執行ましませ共、一滴の潤ひなし。公卿詮義の上一百人の

舞姫を集め、神泉苑の池にて法樂の舞を行せ給ふ。九拾九人迄舞けれ共、そのしるしなし。百人目に静、既に舞んとせし時、御棧敷御簾の内より、

御衣を給り、則静おそれ三々是を着し舞けれハ、車軸の如く雨降なり。則此舞衣なり。是を蛙蟻電舞衣と云。然に義経卿、頼朝公の御勸氣を蒙り、落人と成給ふ。静、義経卿のおもひ人なれば、静を鎌倉へ召れ、義経の御行衛問せませ共、知らざるゆへ御いとま給り、静おもふよふ義経卿東妻に忍ひ居給わん。幸に是迄下り、空しく都に帰らんも無念也。御行衛を尋んと侍女琴柱を召連、當國下邊見。と云里迄下り給ふ。然に往來の人々に義経卿の御行衛を尋ければ、されば義経卿ハ去頃奥州高館にてかく空しくなり給ふと語りもあえず。静泪に袂を潤し、誠にたのみつれなき世の有さま、是非陸奥迄も

尋行んと思ひしに、心尽せし甲斐なく、かゝる浮世になからえハ、剃髮染衣の身と成て、御菩提を吊んと橋を〔則下辺見村思案橋是也〕越て前柳¹⁰と云里にかゝり、迷ひし道の印にと手元の柳引結び、都の方に趣給ふ。此所を静歸と云。當寺より三十丁程¹¹東にあたり、結び柳あり。夫より川¹²をこえ、伊坂¹³と云里にかゝり給ひしに、いとさへ秋ハ物うきならひ成に、旅の勞とひとしく、思すも定なき世と諸ともに壁辺の露ときえ給ふ。琴柱泪と共に當寺に葬し墓のしるし一もとの杓を苗置ぬ。今に是を一本杓と云〔但廻り式丈余¹⁴〕。栗橋宿うら伊坂村¹⁵にあり。本尊并頂戴の御衣、義経卿よりかたみの懐劔當寺に納り常二什物と成畢ぬ。

一 鑑 義経卿奥州下向之節御預りなり

（中略）

一 阿弥陀如来 静女守本尊慈覺大師¹⁶御作

(中略)

右之外畧之

當時御寄附之次第

一 寛政十二¹⁷申九月白川越中侯¹⁸舞衣高覧之上近臣

より内外箱御寄附なり

一 文化五¹⁹辰五月佐竹右京太夫侯²⁰同高覧之上近臣

より御袱一張御寄附なり

一 文化四²¹卯四月中川飛驒侯²²同高覧之上御袱一張

御寄附也

【注】

1 真宗大谷派の寺院。2 現在の久喜市高柳。3 西暦
二二二三年から二二二九年まで。4 後鳥羽上皇。5 静御
前。6 源義経。7 源頼朝。8 現在の茨城県古河市下辺

見。9 岩手県西磐井郡平泉町高館にあったとされる奥州藤
原氏の居館。衣川館または判官館ともいう。10 正しくは前
林(現在の古河市前林)。11 一町(丁)は約一〇九・〇九メー
トル。12 利根川。13 現在の久喜市伊坂。14 一丈は約三
〇三メートル。15 現在の久喜市伊坂。16 第三代天台座主
円仁。17 西暦一八〇〇年。18 白河藩主松平定信(元老中)。
19 西暦一八〇八年。20 出羽秋田藩主佐竹義和。21 西暦
一八〇七年。22 関東郡代中川忠英。

六 原念斎『許我志』所収「静女」抜粋

中田ノ光了寺¹二源義経ノ妾静²ガ遺物、後鳥羽院³
リ賜リシ、縫二雲竜ヲナセシ舞衣、又タ白木ヲ以テ
作リシ義経ノ隻鏡⁴、及ビソノ守リ刀アリ。舞衣ノ如
キハ、諸貴公求ムル者多ク、五分⁵或ハ寸⁶ノ方切ツ
テ与ヘシト云。高了寺⁷元ト幸手ノ高柳村^{ホウヤト}ニアツテ、

則チ高柳寺ト称セリ。此ニハ静ノ墓モアリ。蓋シ義経

ヲ追ヒ尋ネ、奥ノ方ヘ行カントテ茲ニテ没セシナラン。

今猶ソノシルシノ杉茂レル本ニ長ケ三尺バカリノ古碑

アリ。此碑正面ニ蓮華ノ上ニ梵字ヲ題シ、其ノ下ニ

光明遍照十方世界正元元年¹⁰己未十月日念仏衆生撰取

不捨ト三行ニ勒スルノミニテ静タルコトヲ記セズ。サ

レド相伝テ是レ静ノ碑ト云。近頃、又中川飛州¹¹静女

之墓ト題セシ新碑¹²ヲ別ニ建テラレシト云。サテ高了

寺何レノ年何ノ故ニテ幸手ヨリ中田ニ移シヤ、且ツ高

柳ヲ高了ト改メシコト、予未タ之レヲ審ニセズ。（後

略）

※〈貼紙〉男沢謹テ云、高柳ヲ高了ト改メシコトハ彼

寺ヨリ鬘グ静女竜衣ノ縁起¹³ニ云、（後略。前出資料五

参照）

【注】

1 真宗大谷派の寺院。2 静御前。3 後鳥羽上皇。4

正しくは雙鏡。5 一分は約三・〇三ミリメートル。6 一

寸は約三・〇三センチメートル。7 正しくは光了寺。8

漢字は現在の久喜市高柳。カナは現在の久喜市伊坂。9 正

元元年銘阿弥陀一尊種子板碑。『栗橋町史 第三卷 資料

編一』一一頁参照。10 西暦二二五九年。11 関東郡代中

川忠英。12 刻まれている文字は「静女之墳」。13 前出資

料五では、「縁記」と表記されている。

七 佐藤一斎『日光山行記』所収「文政元年

九月十三日条」抜粹

（原漢文。『佐藤一斎全集』第二巻の訓読）

十三。問く雨ふり、問く霽は。鶉鳴に発す。籃輜

伊軋、忽ち睡り忽ち覺む。東も亦た漸く白む。堤に
 循ひて行く。堤外は即ち利根川なり。時に帆檣を
 看る。栗橋の駅に抵る。関津¹有り。是を武・総の
 界と為す。関南の伊阪村²に静女の墓有り。老杉、
 輪困たり。大いさ七抱³、高さ九仞⁴可り。枝条は
 旁午として鬱蟠、中身は科空⁵たり。試みに其の根を
 鋸きて之を嗅ぐ。氣烈し。蓋し六百年外の物ならん。
 既に渡を杭すれば、中田の駅たり。駅北の光了寺⁵は、
 即ち静女の香華処なり。舞衣一領、護身刀一口、
 馬鎧一双を蔵す。舞衣は紺色の繪なり。肩背に日
 月七星、蓬萊雲鶴を繡りす。伝へて後鳥羽帝⁷の賜
 ふ所と為すも、然否を審らかにせず。刀は鏤渋甚
 だし。鎧は全木を剝りて之を為る。材は楓に類す。
 蓋し、武蔵鎧と称する者、伝へて、以て源豫州⁸の
 物と為すも、疑ふべし。寺は旧と、伊阪村に在り。

後に此に徒す。（後略）

【注】

- 1 栗橋関所（房川渡中田関所）。2 現在の久喜市伊坂。
- 3 成人男子七人が両手を左右に広げて囲える幹周り。4 非常に高い例え。5 真宗大谷派の寺院。6 正しくは馬鎧。
- 7 後鳥羽天皇。8 源義経。

八 光了寺廿一世釈西明「静女蛙蟻竜舞衣畧

縁記 抜粹

（原文は句読点なし。参考のため付す。）

一 静女の舞衣は下総國葛飾郡中田宿岩松山聖徳院光
 了寺¹に蔵する所也。此寺往昔は武州高柳村²に有

て高柳寺と号し、天台宗也。建保年中³、宗祖親鸞聖人御入まし〜たりし。其時の住持は後鳥羽院⁴の北面土岐又太郎國村の次男、出家して權大僧都法印圓崇と云し人成しか。御弟子となり法名西願と下され、浄土眞宗光了寺と改号せり。其後寺を爰に移す也。

一 静女八無双の舞の上手にて、源判官義經⁵の思ひ人也し事八世にあまねく知る所也。一とせ、後鳥羽院の御宇に大に早慙し、田園草木も枯果むとして國民の愁大方ならず。因て貴僧高僧を召れ雨乞執行せさせ給へとも、一滴の潤ひなかりしか、公卿詮議の上一百人の舞姫を集め、神泉苑に行幸なりて法楽の舞を行せ給ふ。九十九人迫まひけれ共、其しるしなし。終に至りて静。既に舞んとせし時、かたしけなくも御棧敷の御簾の内より、御衣を賜る。

則静是を着し舞けれハ、雨降こと夥かりしとぞ。則是を蛙蟬龍の舞衣と号す〔此御衣をあま龍の舞衣と号す事、いかなる故と云事をしらす。御衣の紋にあま龍⁷の如き形有故にやあらんか〕。然るに義經、頼朝卿⁸と御中不和となり、落人と成給ふ。静ハ義經の思ひ人なれハ、鎌倉へ召れ義經の御行方を問給へとも、しらする故御いとま給はりぬ。静、其後義經は東妻に忍ひ居給ふよしをほのきく、御行へを尋んと侍女琴柱を召連、當國下辺見⁹と云里迄下り、往來の人々に義經の御行へを尋ぬれハ、義經ハ去頃奥州高館¹⁰にて空しくなり給ふと語るを聞、悲しひに堪す。是非陸奥迄も尋行んと心を尽されしかひもなけれハ、かくて憂世に在んより剃髮染衣の身と成て、御菩提を吊んと橋を〔則下辺見村思案橋是也。爰にて静とやかく案し煩ひし故の名と云り〕越て前橋¹¹と

云里にかゝり、迷ひ来りし道の験にと柳を結び置、

爰より又都の方へと志し給ふとなり。此所を静帰と

云〔當寺より三十丁¹²程東にあたり、結び柳今にあり〕。夫より利根川を越、伊坂¹³と云里に至り給ひし

に、いとゞさへ秋ハかなしき習ひ成に、深き歎にしつまれしに、旅の労や増りけむ。はかなくも道の邊の草葉の露と消給ふ。琴柱泪とゞもに烟となし墓の印に一もとの杉を植置ぬ。今に是を一本杉と云〔但廻り式丈余¹⁴。栗橋宿の裏伊坂村¹⁵に有。當寺より十餘丁〕。静の今はの際まで持たりし彼舞衣並守り本尊、義經都を出し時形見に賜りし懷釵とを、菩提の為に當寺に納め今に什物となり畢ぬ。

一 蛙蟻籠舞衣 別に図を出す

一 形見懷釵

一 守本尊阿弥陀如来 慈覚大師¹⁶御作

外二當寺什物左の如し

一 燈 義經奥州下向之時被預所也〔此品静女ノ遺物

ト均ク、當寺に有事奇偶ナルカ〕

〔中略〕

一 右静女の舞衣、當寺に蔵する事年久しといへとも、見ん事を乞ふ人さのミ多からさりしに、昇平の御世のしるし、かゝる古物を好ミ給ふ人々も多く成たるにや。近頃に至りてハ當駅通行の方々、貴賤となく懇にミンことを乞給ふこと少からず。されと貧寺なれハ箱ふくさやうの物いと古ひて、ふつゝかになりつれと、改めかふるにも及はさりしに、近々御寄附有て、今ハ如何なる貴人に見せ参らするとも恥しからすなりぬるまゝ左にするす。

一 内箱外箱〔寛政十二¹⁷申九月白川侯¹⁸、近臣に命

せられて御寄附〕

一 袱 一張〔文化四¹⁹ 卯四月飛騨守中川忠英君²⁰ 御寄附〕

一 同 一張〔文化五²¹ 辰五月秋田侯²²、近臣に命せられて御寄附〕

一 縁記表相 二重箱服紗共〔文政六²³ 末十一月主水正石川忠房君²⁴ 御寄附〕

右之外近來江府歌人清水濱臣²⁵、小林良幹杯の催にて、舞衣によれる詩哥を集め、一冊として納めらる。其外遠近の好事の人つきくに詩歌等を寄らるゝこと、年を追て絶す。されハ静女のゆゑよしも、日にしたかひて世に廣こりぬる事の有難さよ。

古来の縁記を寫せる板行年を経て磨滅し分りかたくなるにより、此度いさゝか文字等の誤れるを正し、寫し改め末書を加へ改板せしむるものなり。

【注】

1 真宗大谷派の寺院。2 現在の久喜市高柳。3 西暦一二一三年から一二一九年まで。4 後鳥羽上皇。5 源義経。6 静御前。7 雨龍は、雨をつかさどると考えられていた中国の想像上の龍に似た動物。体は黄緑色、尾は赤く細い。角はない。螭龍・みずちともいう。8 源頼朝。9 現在の茨城県古河市下辺見。10 岩手県西磐井郡平泉町高館にあったとされる奥州藤原氏の居館。衣川館または判官館ともいう。11 正しくは前林（現在の古河市前林）。12 一町（丁）は約一〇九・〇九メートル。13 現在の久喜市伊坂。14 一丈は約三・〇三メートル。15 現在の久喜市伊坂。16 第三代天台座主円仁。17 西暦一八〇〇年。18 白河藩主松平定信（元老中）。19 西暦一八〇七年。20 関東郡代中川忠英。21 西暦一八〇八年。22 出羽秋田藩主佐竹義和。23 西暦一八三三年。24 勘定奉行石川忠房。25 江戸飯田町の歌人、医師、国学者。

九 松浦静山『甲子夜話 続篇』所収「巻之

八十六 一 下総国光了寺什物、静女白拍子

舞衣之事并墳墓石碑之図 ○静之事〔寛政〕日

光道之記』考』注付』抜粹

予が中の相撲年寄玉垣¹、業のことに就て、総房を経て野州へ往き帰れるとき、予に自記の小録を示す。この玉垣は損の産にて、其業には似ず、少く文雅を好めり。因て予が年来古の妓舞を述るを知て然する也。

曰ふ。下総国葛飾郡古河²の辺、中田村光了寺³は、門徒宗にて、什物に静御前白拍子の舞衣有⁴之。蝦夷錦、胸に金糸にて日月の織紋あり。外に九寸五歩⁴、手道具等品々有⁵之。此こと白川楽翁様⁵の御間に入、先年⁶御入有⁷之（侯退役の後、その領邑白川順視の暇を賜はりし旅中のことなり）、古舞衣、片

袖御所望に而、御借り請に相成り、其代として、御紋付御ふくさ并二重箱、白川少将と御しるし御奉納有⁸之候。

この舞衣は、予も先年日光参詣のとき、この寺道傍なれば、立寄りて親く視たり。されども蝦夷錦には非ず。薄き織もの也。縫紋のさまは、成るほど唐物とや云べき。夫より後、光了寺勸化の為迎、此品々を江都に携へ出たることありて、其折も復視たるゆゑ、委しく図をなし紙形をも造置しが、今其所在を失ふ。他日索得ば後⁹へに補はん⁷。又白川少将のふくさも見たり。是はかの言の如にして、薄紫に白紋字なりし。この余は予が『日光道記』の文あり。（中略。前出資料一参照）又光了寺に板施する縁記の所云は、（中略。前出資料八参照）

玉垣曰。中田村と古河との間に、しあん橋と云有り。

静御前奥州へ下向の節、しあん致され候て、武州葛

飾郡栗橋在、伊坂村にて死去なされ候。其塚の印

とて、大木の杉有り。太さ私五廻り半、凡三文余。

と申すこと。（●私の五廻とは、自れが手にて五回

と云意なり）

又玉垣が記せし所あり。是は不用のものながら、暫時

にして古今の違あり。予が此辺を經しとかはれば、こゝ

に姑く写す。（後略）

【注】

- 1 玉垣名跡七代目朝ノ雪勘三郎。2 現在の茨城県古河市。
- 3 真宗大谷派の寺院。4 一刃の部分の長さが約一九センチメートルの短刀。5 白河藩主松平定信（元老中）。6 寛政十二年。7 不明。十五頁及び十六頁写真参照。8 現在の久喜市伊坂。9 一丈は約三・〇三メートル。

十 岡鹿門撰文「静女冢碑」

（原漢文。早稲田大学名誉教授村山吉廣氏の訓読）

栗橋停車場の東のかた百歩に古冢有り。傳へて舞妓

静女の墓と為す。曰く、「静女已に鎌倉を遁れ、廷尉

の陸奥に在りと聞き、一婢を従へ、間かに關東に下る。

此に至りて、廷尉の害に遭ふを聞き、一慟して遂に絶

ゆ。邑人之れを憐み、高柳寺の僧に請ひ、誦經して

以て葬る」と。高柳寺、後、中田に移り光了と改稱

し、⁴静女の錦段の舞衣を感む。傳へて後鳥羽法皇、

雨を神泉苑に禱りし時に賜ふ所と為す。冢に老いたる

杉樹有り。樹の大きさは午陰數十弓を蔽ふ。安政

年間、に儻る。邑豪柳沼氏、其の淫滅に歸するを恐れ、

柁を樹て、域を表し、一碑を建て、余をして撰文せしむ。

静女は歌舞を以て人に事ふる者にして、千載の下、

史氏其の事を張大にす。之れを詩歌にし、之れを圖書にし、童幼婦女の稱道すること昨日の如きは、豈に其の流離顛沛するも敢へて一の義に従ふを變へざるの故にあらざるか。夫れ廷尉は大軍を率め、猛將、健卒、奮躍して先を争ひ、或は及ばざるを恐る。一旦冤罪を蒙れば、起して之れを敵にす。其の亡ぐるに従ふ者僅かに十數名のみ。しかして静女の速に就くや、天とする所を芳山に望み、懐ふ所を連環に寄す。死を視ること歸するが如し。右府の威を以て之れを如何んともする無し。彼の長槍、大馬、自ら百夫の雄を許して、しかも反覆すること極まり無く、唯だ利をのみこれ視るもの、静女の風を聞かば、獨り赧然とする所無からんか。宜なるかな、稱道せられて今日に至ることや。歳の丁亥⁸、余、柿沼氏⁹に客たり。光了寺を過り、錦段の舞衣を觀て、其の艶粧して離別の曲を唱へ、

右府夫妻¹⁰をして色を變ぜしむるを想ひ、慨然として之れを欠しうす。因りて逸事を歴叙し、係くるに銘を以てす。銘に曰く。

雪を芳山に踏めば 涕淚滂沱たり

懷を連環に寄すれば 心曲亂麻たり

此に埋むること玉の如し 往事の逝波

芊綿たる芳草 風雨落花

英雄氣盡く 虞を如何んせん

【注】

- 1 現在のジェイアール宇都宮線栗橋駅よりも古河寄りにあった旧駅舎。
- 2 源義経。
- 3 現在の茨城県古河市中田。
- 4 現在の真宗大谷派寺院光了寺。
- 5 一弓は約一・八メートル。
- 6 西暦一八五四年から一八六〇年まで。
- 7 源頼朝。
- 8 明治二十年。
- 9 碑陰に「伊坂村」の「柿沼利兵衛」の名がみえる。
- 10 源頼朝・北条政子夫妻。



雨竜の丸①



雨竜の丸②



隅立て雨竜



松皮雨竜



平角雨竜



雨竜菱



雨竜木瓜



入れ違い雨竜



抱き雨竜に五三桐



抱き雨竜に師の角字



抱き雨竜に左三つ巴



丸に抱き雨竜に橘

色々な雨龍(千鹿野茂「日本家紋総鑑」(角川書店) 1166頁)

同書によると、「竜紋の形は竜と雨竜に大別される。」とある。また、静御前が舞ったとされる京都の神泉苑には、色々な形で雨龍の紋を見ることができる。

- 1821 杉本樽園「静女舞衣の記」(『海録 卷三』所収)
- 1841 為永春水「安宅の關并に静女の古跡」(『閑窗瑣談 卷之一』所収)
- 1855 赤松宗旦「静女舞衣」(『利根川図志 卷二』所収)
- 1881 十返舎一九『奥羽一覽道中膝栗毛 第二編 卷之上』
- 1881 十返舎一九『奥羽一覽道中膝栗毛 第四編 卷之上』
- 1892 社会散士「静および白拍子」(『風俗画報』第42号所収)
- 1892 佐藤弘毅「源廷尉の妾静女の墓」(『好古叢誌』初編第2巻所収)
- 1892 宮崎幸麿「静女の墓追考」(『好古叢誌』初編第2巻所収)
- 1900 清水濱臣「静女舞衣懐古帖序」(『高等国文 近世名家文 下巻』所収)
- 1901 饗庭篁村「水戸の観梅」(『旅硯』所収)
- 1917 藤沢衛彦「静の舞衣」「静の思案橋」「静の墓」「一言の宮」(『日本伝説叢書 北武蔵の巻』(日本伝説叢書刊行会) 所収)
- 1919 藤沢衛彦「静女舞衣」(『日本伝説叢書 下総の巻』(日本伝説叢書刊行会) 所収)
- 1922 田中智学「史劇 栗橋の静」
- 1925 中島寅之助「(一) 静女の墳墓」(『郷村郷土誌 全』所収)
- 1929 岩井八郎「静女の塚と伝説」(『埼玉史談』第1巻第1号所収)
- 1930 小谷部全一郎『静御前之生涯』(厚生閣)
- 1940 「静御前の墓」(『郷土旅行叢書』第3巻所収)
- 1943 建部友太郎「静御前の墓」(『武相の史蹟』(双龍製菓株式会社) 所収)
- 1967 「川の関所・静御前」(『さいたまの街道』(さいたま新聞社) 所収)
- 1987 橋本三喜男「日光街道独歩」(『歴史と旅』第185号所収)
- 2000 横山吉男「日光街道の今昔15回 栗橋宿」(『地図ニュース』第337号所収)
- 2001 横山吉男「日光街道の今昔16回 中田宿」(『地図ニュース』第341号所収)
- 2001 中村健治「新御伽草子 卷之二 あま龍の守の生涯」(近代文芸社)
- 2004 内藤浩誓「静御前の伝承と文芸」(國學院大學大学院研究叢書文学研究科13)
- 2005 白井哲哉「義経渡海説を語らせたのは誰かー近世武蔵国の事例から」(『北海道・東北史研究』第2号所収)
- 2005 下山忍「義経の妻妾と静伝説」(大三輪龍彦・関幸彦・福田豊彦『義経とその時代』(山川出版社) 所収)
- 2008 さいたま文学館『企画展 よみがえる歴史ヒーローの伝説ー直実、重忠、静御前たちと文芸作品』
- 2009 白井哲哉「名所化する遺跡ー静御前墓所伝承地の200年」(国際日本文化研究センター編『旅と日本発見 移動と交通の文化形成力』所収)
- 2010 橋場万里子「利根川ー源頼政・静御前の供養の地ー」(『検証・日本史の舞台』(東京堂出版) 所収)
- 2013 平野杏奈「静御前像の変遷と語られた女性像」(筑波大学情報学群知識情報・図書館学類2012年度卒業論文) 抄録

※ このほか、「愛宕山経蔵密院之紀」、「古河志」(『古河市史 資料 別巻』(古河市) 所収)、
『新編武蔵国風土記稿 葛飾郡 五巻』(文献出版) なども参考にしました。

房川船橋之図の写し(久喜市立郷土資料館蔵)

12代將軍徳川家慶(いえよし)が日光社参をする時に架けられた船橋の様子を描いた瓦版(天保14年)を、明治時代以降に写したもの。左下部に大杉と石碑も紹介されていて、1843年頃には目印として意識されていたことがわかる。



歴史資料でよむ久喜市ゆかりの人物ブックレット ②

静御前の伝承

発行日 平成29年 3月30日
監修者 白井哲哉(しらい てつや)
編集 久喜市教育委員会文化財保護課
発行 久喜市教育委員会
〒346-0192 久喜市菖蒲町新堀38
印刷 有限会社イノウ印刷
〒346-0005 久喜市本町2-2-21

裏表紙

静女古墳図

(『新編武蔵国風土記稿 葛飾郡 卷之三十八』・国立公文書館蔵)

杉の木の左下に「静女之墳」の石碑が、右下に「坐泉の句碑」が描かれている。

